

2015 年 3 月 21 日 (土)

参加者：八島 (授業者), 辻本, 岡川健太

議論内容

今回は第 96 回研究発表協議会において実施された八島恵美先生の授業についての反省を行なった。授業では、同じ大きさの折り紙を二回折ることにより三角形と正方形を作り、児童とどちらが大きいか考えるというものであった。この教材の意図は、折った折り紙の大きさを比べることにより、児童から「等分」という考えを引き出し、分数の意味を理解させることであった。授業においては、生徒は初め、様々な意見があったが、次第に生徒は両者とも大きさが同じであることに気づいていたようであった。生徒は自由に自分の意見をいい活発な意見交換がなされた。

反省点として、授業者から「もとの大きさ」という言葉が、音や音声や文字としては出ていたが、折り紙の大きさとして板書されていなかったために、「もとの大きさ」ということを強調して指導することを計画していたので、不十分であったことが挙げられた。

反省点を議論する中で、それについては、次の授業において「元の大きさ」に関して強調することができ、生徒たちは理解することができていたため、「等分」という考えを引き出すという今回の授業においては上手くできていたのではないかという結論となった。また当日の協議会において参加者から、3 年生の分数指導との関連についての指摘があった。研究としては、6 か年間の分数指導の中で、第 2 学年の位置づけと本時の狙いについて明確にした提案が必要であったと指摘いただいた。それについては、第 2 学年で元の大きさを当分した大きさについて理解し、第 3 学年で単位に満たない大きさの指導という流れを示すべきであったと反省しておられた。具体的には今回の授業では分割分数を行なうことにより、児童に分数が当分であることを理解させ、第 3 学年において単位分数を導入することである。そして今回の分数の導入、そして、次の授業内容を通して分数が元の大きさの等分という概念をしっかりと把握することにより、単位分数の概念の定着が容易にできるようになるのではという議論となった。

(文責：岡川健太)